

## 今月のことば



9月は二十四節気の立秋が過ぎて大分経つのですが、暑さが残り、いつも乗り切るのが大変です。学校勤務の頃は2学期が始まって、生徒以上に自分も授業をするのがつらいのですが、それを気取られないようにカラ元気を出して過ごしていました。しかし、中旬を過ぎると、やはり秋の気配を感じて、

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども  
風の音にぞおどろかれぬる」(藤原敏行)

の歌を思い出したものです。

Newsletterの今号が発行される頃には、  
金木犀の香りが風に運ばれて教室にも  
届くことでしょう。

(川崎清)



## 目次

## 【月例会速報】

(詳細は3月発行予定の紀要に掲載予定です)

1. 豊田典子「日本人と異文化」
2. 田中孝史「ロシア人にとって国際的とはどういうことか？」
3. 山崎僚子「価値観を認め合うー英国ゴスサブカルチャーからみる相互理解」
4. 津田ひろみ「仲間と共に学びを深めるーリスニング・ログの活用」
5. 早坂牧子「音楽大学における CLIL 教育の実践と課題」

# 日本人と異文化

豊田典子

新潟医療福祉大学

## 【要旨】

少子高齢化，移民政策，インバウンドビジネス，コロナ禍によるオンライン文化など，様々な内外の要因により多様化する日本社会における国際教育を考えるために，日本の異文化エンカウンターについて時空間的に俯瞰した視点で概観する。まず，「日本人」とはと考えることで，国と国(internation)とは何かまで考え，1)「国際性」の定義への考察し，国際化から異文化コミュニケーションへ，そして多文化共生への変容を提案する。そして，その背景として，2)日本が歴史的にエンカウンターしてきた異文化のパターン 3)多様化する日本社会における3つのケーススタディを紹介し，移民児童と同化政策，異なった価値観を受容する課題，デジタル社会異文化のデジタルデバイドの課題やサブカルチャーのグローバル化現象について考えたい。それらを通して，変革を迫られる国際教育のあり方を議論する。脱・国際化，脱・同化政策を意識することで，隣人の異なる価値観に敬意を払い，許容し，かつ自分の価値観を常に養っていく姿勢に変えていかななくてはならない。しかし，その為には，日本の「国際教育」はどう変わっていくべきなのか。発表後のパネルディスカッションにおいて，他の専門家ら及び参加者とともに，さらに議論を深めたい。

## 【参考文献】

Erez, M. & Gati, E. (2004). A dynamic, multi-level model of culture: From the micro level of the individual to the macro level of a global culture. *Applied Psychology = Psychologie Appliquee*, 53(4), 583–598.

## ロシア人にとって国際的とはどういうことか？

田中孝史  
東京外国語大学

### 【要旨】

現在、私たちが「ロシア」ととらえている国は、かつてのソビエト連邦やロシア帝国を（事実上）継承した国家で、その成立の過程には帝国主義的、植民地主義的な領土拡張があり、ロシア以外の多くの民族を含んでいる。現在のロシア（Российская Федерация；ロシア連邦）は、2017年の憲法改正を経て、政策上は多民族・多文化な現状を維持し、国民の多様性を尊重、保護するとうたってはいるものの、一方ではロシア語やロシア民族文化を基盤にした同化政策を進め、あたかも単一民族の国であるかのように振る舞おうとしている。「ルースキー・ミール（ロシアの世界）」と呼ばれる概念からは、ソ連崩壊から30年経った今も、かつて同じ連邦を構成していた国々を「故地」や「同胞」のようにとらえていると考えられ、それは、これまでロシアが各国に対して行ってきた軍事侵攻にも見てとれる。2022年2月に始まったウクライナにおける戦争についても同様に、ロシアがウクライナを「外国」として見ていないことは、ロシアにおけるロシア語の使用例にも観察される。現代のロシア人にとって、あるいは日本人にとって「国際的」とはどういうことかについて話題を提供し、パネリストや参加者の皆様と意見交換をしたい。

## 価値観を認め合うー英国ゴスサブカルチャーからみる相互理解

山崎僚子

名古屋学院大学

### 【要旨】

ゴスという言葉を知ると日本では、フリルやレースのたくさんついた服を着こなす、ゴスロリを思い浮かべる人も多いと思う。ゴシック (Gothic) という言葉の起源は古く、建築様式、美術、文学から音楽、ファッションにおける表現様式を指す。日本のゴスロリは西洋のゴス・スタイルから、日本独自に派生したレパートリーのひとつなのである。本発表では、発表者が行った、英国で活動するゴスへのインタビューの結果に基づき、彼らがどのような活動をしているのか、また少数派としていかに差別を受けてきたかを報告する。ゴスに対するイメージがマスコミによっていかにゆがめられたか、そして特に英国のゴスにとって忘れられない事件となった、ソフィ・ランカスター事件について言及したい。襲撃事件のあとに遺族を中心として設立された Sophie Lancaster Foundation と 彼らの活動、 SOPHIE(Stamp Out Prejudice Hatred and Intolerance) キャンペーンは、マスコミにも大きく取り上げられた。このような活動は参加者に、メインストリームから逸れた音楽やファッションを好んだり、独特な自己表現様式を楽しんだりする人々への差別を減らす教育として機能していると思われる。本発表はイギリスのゴスというサブカルチャーを通して、異なる価値観をもつもの同士が、互いを尊重する方法を模索することを目的とする。

## 仲間と共に学びを深めるーリスニング・ログの活用

津田ひろみ

明治大学

### 【概要】

本研究は、授業でリスニング・ログに基づくディスカッションを行い、その効果を質問紙により検証することを目的とする。大学1年生のリスニングのテキストはCLIL教材であるが各ユニットのレクチャーは7分程度で、週2回の授業だけではリスニング力を高めるのに不十分であるため、授業外の学習を記録するリスニング・ログを課題にした。ログを記録することの学習効果はKemp (2010)が確認している。本実践では、授業中にログについて小人数グループで意見交換し、次に代表者がクラス全体に発表する、という2段階の英語のアウトプットの機会を設けた。ログに記録するのは単元のテーマに沿ったものだけに限り、聞いた内容の概要だけでなく自分の考えを述べること、原稿を読み上げるのではなく聞く人に伝わるように話すこと、他の人の発表を聞いたら質問やコメントを返すこととし、グループでは役割を分担して誰もが英語を話す機会を持てるよう工夫した。本実践によりリスニングの習慣を作るだけでなく、自分の考えを仲間に伝える力を伸ばし、オーセンティックな英語に触れることで学生が社会や世界との繋がりを意識することを目指した。

調査の結果、CLILの観点を取り入れ仲間と学び合うことによって、学習ストラテジーを駆使しながら学習内容を自分事化し、幅広い知識を得て学びが深まる効果が確認された。一方、英語力による発言の量に偏りが生じるという課題が残った。

### 【参考文献】

Kemp, J. (2010). The listening log: Motivating autonomous learning. *ELT Journal* 64 (4), 385-395.

## 音楽大学における CLIL 教育の実践と課題

早坂牧子  
東京音楽大学

### 【概要】

本発表では、発表者が所属する東京音楽大学での実践を例に、音楽大学における英語教育の問題、現状を紹介しながら、CLIL を切り口とした音大英語教育の可能性について、音楽学出身の英語教員という立場から問題提起したい。他の一般大学と同様、音楽大学においても英語は1・2年生の必修科目となっている場合が多い。こうした必修の英語科目では特にCLILが意識されることはないが、音楽の実際の現場においては、日常会話に加え、音楽について抽象的な概念を表現する、楽曲を紹介する、具体的なテクニックについての説明を理解する、オーディションの申込みをする、音楽に関する文献を読む、米語・英語の発音を歌い分けるといった、専門性を備えた英語能力が要求される。音楽家に必要な英語力を養成する英語の授業づくりが求められているのではないかという問題意識から、東京音大では本年度試みに音大生向け教科書を導入し、1・2年生約700名を同じ教科書で指導することにした。春学期の学生アンケートでは、音楽をテーマとする英語を学んだことで英語学習に対する興味がより湧いた、一般向け英語教科書よりも音楽の教科書の方が学びやすかった、といった好意的な声が多く聞かれた。本発表では、いくつかの実践例、学生アンケートの結果を紹介しながら、音楽のCLILを取り入れることの効果と今後の展望について報告する。

## 近刊情報および学会発表

近々のご著書の出版予定，あるいは学会発表のご予定がありましたら，情報をお寄せください。

### 【学会発表情報】

- ・学会名，日時，発表者，タイトル，参加条件（申し込み，締め切りなど）
- ・問い合わせ先など

### 【出版情報】

- ・著書名，著者名，発行年または発行予定日，出版社名，（価格）

## Newsletter 記事募集

Newsletter の記事は会員であればどなたでも投稿できます。研究発表の後 1 週間を目処に HP の「NL 記事投稿フォーム」よりお送りください。NL は紀要と異なり「速報」ですので，字数制限にお気をつけください。

## 紀要投稿募集要項

本研究所では，広く会員の皆さまからの紀要原稿を募集いたします。ふるってご応募ください。

- ◇ 紀要に投稿ご希望の方は HP 上の「刊行物」のプルダウンから「投稿申請フォーム」に **9 月 30 日**までに必要事項をご記入の上，お申込みください。
- ◇ おもな紀要投稿募規定については本研究会 HP の，「刊行物」にある「紀要投稿規定」（HP 版）をご覧ください。
- ◇ 紀要原稿の募集期間は **10 月 1 日～12 月 11 日**です。
- ◇ 紀要は **3 月 31 日**発行予定です。